

# 第66回全国医学生ゼミナール in 大阪

## 企画報告書

第 66 回全国医学生ゼミナール in 大阪  
現地実行委員長 大阪公立大学 5 年 芥子のぞみ子  
全国実行委員長 信州大学 5 年 直江翔吾



2023 年 8 月 18 日から 20 日の 3 日間にわたり、第 66 回全国医学生ゼミナール in 大阪が、現地・オンライン併用で開催されました。「誰一人取り残さない医療を目指して～都市部の医療から考える～」をメインテーマに掲げ、全国各地から多くの医学生や医療系学生が集まり、学びや交流を深めました。3 日間で学生・大学院生 160 名、一般参加 65 名や高校生の方々にも多く参加していただきました。4 年ぶりの対面開催となったことで現地参加者は大いに盛り上がり、全ての企画を大成功のうちに終えることができました。

### 企画報告

#### 学生発表

##### メイン企画「誰一人取り残さない医療を目指して～都市部の医療から考える～」

自分が求めるタイミングで医療が受けられるのか。またいつでも希望する医療を受けられるのか。今年のメインレポートでは、「都市」大阪における医療アクセスへの問題意識を出発点として、大都市であるからこそ、アクセスの不均衡や排除の問題がより顕著に現れてくるのではないかと考え、学習を進めてきました。ここでは、最初に 3 つのアクセスの問題があげられました。今年のメインレポートでは、それらの分析を元に、実際の事例を見ることで、医療アクセスの問題点を考えました。その後、そのアクセスの分析は正しいのかについて考えました。以下、章ごとに内容を振り返ります。

## 第1章 西成

この章では、西成区のあいりん地区を取り上げました。あいりん地区の現状と歴史について触れ、その後あいりん地区の問題点として薬物に関する問題を取り上げ解決策などを考えました。その後、問題への向き合い方などを8月9日に行ったFWを元に考え、学習をしました。

## 第2章 コロナ禍の診療

この章では、コロナ禍の診療を取り上げました。コロナ禍において、未知の感染症と向き合うことの難しさや、医療資源不足によって対応が遅くなっていることを事例として扱いました。また、誰一人取り残さない医療において、訪問診療が最後の砦になる可能性を取り上げ、訪問診療の上手い活用の仕方について考えました。

## 第3章 オンライン診療

この章では、オンライン診療を取り上げました。オンライン診療では、コロナ禍以前から存在していたものの、コロナ禍から運用が大きく進みました。ここでは、オンライン診療の実際の活用の仕方を取り上げ、オンライン診療のメリット・デメリットや今後の展望について考えました。



## 第4章 私たちと医療アクセス

この章では、上記3章を踏まえ、最初に私たちが考えた医療にアクセスできない3つの分析が本当に理にかなったものであるかを考えるとともに、医療にアクセスできない原因とその状況を打破する方法や学生が出来ることについて考えました。

### 平和企画「人権の終わりなき追求」

今年の医ゼミの平和企画は「人権」でした。開催地大阪の諸問題を考えたときに、路上生活者等の困窮者や在日外国人たちの暮らしや医療が守られていないという現状認識があり、このような人権問題を平和企画で扱いたいという声が上がったことから始まりました。そこから、そもそも人権とは何か、なぜ人権は大切とされているのか、といった根本的な問いが発せられ、最終的には広く歴史、社会、医療の視点から人権についてまとめたレポートが出来上がりました。レポートのタイトル「人権の終わりなき追求」には、人権の追求には終わりがなく、先人がそうしてきたように、これからも私たち自身がこの理想を形にしていかなければならないというメッセージが込められています。

以下では、レポートの内容を簡単に振り返ります。

## 第1章 人権の歴史

最初の章では、そもそも人権とは何か、という問いに答えるべく、その歴史的な成立過程を振り返りました。古くは紀元前から存在した権利の概念が、徐々により多くの事柄を含むようになり、また徐々に多くの人々に適用されるようになっていったというのが基本的な流れです。その推進力は先人たちの努力であり、その変化は現在もなお続いています。したがって、もし人権を守りたければ、私たちはこの営みの続きに存在することを自覚し、より良い人権の形を追求し続ける必要があります。

## 第2章 人権の今

この章では現代の人権問題に焦点を当てました。前の章で見てきた通り、人権の内容は時代と共に刻々と変化してきました。ここでは具体例として、第2次世界大戦以降特に注目されるようになった、ジェンダー平等やLGBTQの権利の問題、さらにSNSでの誹謗中傷の問題を紹介しました。そこで見えてきたのは、私たちの認識の遅れです。多様な人がいること、画面の向こうには血の通った人間がいること、こうしたことが想像できず、相手への思いやりを忘れたときに、権利の侵害が起きてしまいます。また、法律の整備が往々にして遅れるという問題があることもわかりました。

## 第3章 医療と人権

この章では、医療における人権問題に焦点を当てました。日本に住む医療者としてまず知らなくてはならないのはハンセン病患者が不当に扱われた歴史です。この問題では、人権の観点からも医学的な観点からも不適切な対応が行われました。医療者が人権を侵害する側に立ってしまうこともあるのです。続いて、外国人医療と出生前診断の問題を取り上げました。言語や文化の面で困難に直面する在日外国人が必要な医療にアクセスするために、医療者としてなにができるのか。一つは「やさしい日本語」を使うなど、最も大きな障害となる言語の壁を医療者自らが少しでも切り崩すことです。出生前診断においても、非常に困難な決断をする当事者たちに、医療者は専門家としてサポートをすることができます。

## 第4章 人権のこれから

最後の章では、これからの人権のあり方を考えました。まず、医ゼミが考えてきた人権を振り返り、私たち将来の医療者が考えたいことを挙げました。医療者としては、その時々での医療行為が患者の尊厳に基づいているか、それは患者にとって本当に必要かを自分自身や社会に問いかけながら価値観や技術をアップデートさせていくこと、そして国民へ働きかけるとともに医療者自身の人権も守っていくことが必要です。



最後に、これからの人権はどう守られていくべきかを考えました。人権の内容は、時代や地域、文化に合わせて常に吟味され続ける必要があります。そして、人権は自然に生まれたものでもなく、神が創造したものでもなく、私たち人間が自分たちのためにつくってきたものです。だからこそ、自分たちの手で守っていかなければならない、と結論付けました。

## 講演会

---

### 「真の国際人を目指すために」

ピーター・フランクル氏（数学者・大道芸人）

2日目の講演会では、数学者であるピーターフランクル先生に「真の国際人を目指すために」という演題でお話をいただきました。グローバル化に伴い医療現場での国際化が求められる中、日本と海外の文化の違い、宗教・民族、コミュニケーションの取り方に対する理解を深めたいということで、医ゼミ企画の中で注目度の高いものとなりました。企画時間は、先生の講演が60分間、質疑応答が30分間と、質疑応答が長めに設けられましたが、先生のご経験やご意見について、予想以上に多くの質問が寄せられました。

ここでは、先生のお話の中で特に印象深かったことについて記します。

#### ・大道芸について

先生ご自身でおつくりになられたカラフルな衣装と大道芸の披露から講演が始まりました。ジャグリングと数学の法則に共通点があることや「0」という概念がいかに特殊で難しいかということが解説されました。参加者の一人が、1～80までの数字を選び、いくつかの質問でその数字を当てるというパフォーマンスは特に盛り上がりを見せていました。

#### ・先生の旅行経験と人の優しさ

先生は、「外国人から見た日本」といった文化比較論的な視点から様々な意見を求められることが多く、世界80か国以上そして47都道府県すべてを訪れています。時には、旅先で出会った人の家に泊めてもらい、人の優しさに触れる経験をされています。昔の人は好奇心があり優しかったといいます。先生の話術とこれまでの経験により、たわいもない話から、現地の人々と生き方や思想について意見交換ができたそうです。しかし現在は、言葉の暴力を見る・聞く機会が増えたといいます。人の悪口を言うことは、自分に自信がないからであり、これからの可能性をつぶしていると言っても過言ではありません。

自分の知見が深まるかは、言語能力よりも心の寛容さ、他者理解、多文化理解ができるかによって決まると言います。将来医療従事者を目指す私たちにとって、聞き上手であることは大切です。特に、医師は司令塔の役割を担いますが、自分が一番偉いとは思わず、患者さんと同じ目線になり、信頼を得ることが大切です。時には、相手との共通点を探すなどのテクニックを用いて、いかに表には出しにくい相手の芯の部分に触れて、深くお話ができる環境や関係性を築くかが重要だとアドバイスをいただき、患者さんや多職種連携において心にとどめておきたい話となりました。



## ・真の国際人とは

真の国際人とは、頭のいいから、英語ができるからといってなれるわけではありません。心の寛容さこそが大切です。そのために人とのコミュニケーションには、初めて会った人にどのように接するか、その人の雰囲気を見て判断すること、そして何か予想外のことが起きても不信感を持たずに、他生の縁だと思い接することが強調されました。スタートとして、まず勇気と自信をもって人に声をかける必要があります。会話が始まってなにかが生まれることにより、その先を楽しむことができます。

今回の講演を通して、人種や宗教、国籍や学歴に関係なく、対等に交流できることが、国際人になるための条件であることを学びました。私たち学生が真の国際人を目指すために、人とのご縁を大切に、他者理解を深め、コミュニケーションをうまくとる姿勢を学べたのではないのでしょうか。

最後に先生から、「keep your hear open.」という言葉をいただき、講演を締めくくられました。

## 「地域に“寄りそ医”30年～人生で大切なことはすべて地域から学んだ～」

中村 伸一先生（おおい町国民健康保険名田庄診療所 所長）

3日目の講演会では、中村先生がご経験から得た人生において大切な考え方や、地域医療において重要な視点についてお話していただきました。講演の中からいくつかのエピソードを抜粋させていただきます。

### 「情けは人の為ならず」「謝ることも許すことも大事」

#### くも膜下出血の誤診

62歳の女性が吐き気と肩の痛みを訴えているため、往診に向かった。一度、くも膜下出血を疑ったが、局所注射と点滴により回復したため、帰宅させ経過観察とした。ところが、その晩に容体が急変したため、CTを撮るとくも膜下出血であることがわかり、そのまま緊急手術となった。中村先生は女性の甥と搬送先の病院玄関で遭遇した際、誤診してしまったことを心から謝罪した。すると、甥は先生に対して一切怒ることなく、「夜中に何度も呼び出し悪かった。間違いは誰にでもある。こういうことはお互い様だ...。」と許してくれた。中村先生は、以前は何事にも否定的で尖った性格だったというが、この出来事をきっかけに人を許せるようになった。幸い、女性は後遺症もなく回復した。

#### 濡れ衣

平成8年頃、名田庄村では保健・医療・福祉の総合施設建設を計画していた。中村先生は村の村長、スタッフ、住民と、福井県立病院での研修義務が終わる2年後に村へ戻る約束をしていた。ところが、福井県立病院での勤務中、名田庄村の村長から電話があり、話があると村へ呼び出された。話の内容は、名田庄村の総合福祉施設での診療の件を白紙に戻してほしいとのことだった。理由は、選挙直前に村政を批判する看板やビラが村中に出回るといふ事件があり、その容疑者と中村先生に関わりがあるという噂を耳にしたからというものだった。中村先生はこの事件に関して全くの無実であったが、父親のように慕っていた村長から首を切られ、絶望を感じていた。その1か月後、再び村長から連絡があり、もう一度会ってほしいと頼まれた。会って話を聞くと、村政批判の事件は自分

の身内の犯行であり、先生の無実が証明されたので、名田庄村に戻ってきてほしいとのことだった。先生は大きな屈辱を感じたが、以前、患者の甥に「間違いは誰にでもある。こういうことはお互い様だ。」と許された過去を思い出し、名田庄村に戻ることを承諾した。そして、平成10年に名田庄村に戻り、翌年の11年に保健医療福祉総合施設「あっとほ〜むいきいき館」の統括責任者となった。

### 人生観に寄り添う医療

終末期の在宅医療・ケアでは、医療者の視点からみた調整（必要なこと）だけでなく、患者の視点から見た希望（大切なこと）にも目を向けることが大切である。

### 名田庄住宅桜の物語

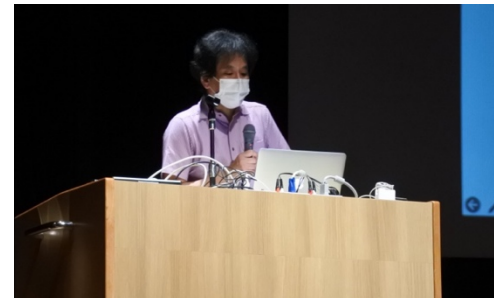
雪国に暮らす人は桜への思い入れが特に強く、訪問診療先の患者の中にも最期に桜を見たいという方が多かった。先生はその願いを叶えるために、患者と桜を見に行った。また、容体が急変し、桜を見ることが叶わなかった患者に対しても、桜の枝や花びらを病室に持って行ったことで患者の家族の心にも寄り添うことができた。

### 癌と戦うも戦わない人もそれぞれ

61歳男性は、多発肝腫瘍とS状結腸がんが見つかり、余命は2ヶ月と診断された。「2ヶ月の延命目的で1か月も入院したくない。でも治療は受けたい。」という本人の意思を尊重し、在宅での化学療法を行うことになった。

79歳の女性は重度の認知症を患っていたが、胸部X線検査でがんが見つかった。女性は

元々医者嫌いであること、そして、「理解ができない本人にとって治療は拷問である」という女性の娘の意見から、がん治療は行わずに在宅で家族と過ごししながら緩和ケアを行うことになった。



## 分科会

---

分科会は学生が自分の興味のある分野を学び、深め、発表する場です。66大阪医ゼミでは8月18日と20日に行われました。

自らの経験や現場での取り組みをもとにした「子ども支援のあり方について〜子ども食堂の現場から〜」、「ヤングケアラーの現状と解決策」、「日本とドイツの医学生留学談」などのテーマや、「性と恋愛とユースヘルスケア」、「笑顔めいっぱい!」、「Planetary Health 〜気候変動と医療〜」などの興味がある分野、社会の問題にフォーカスしたテーマ、「卒年分科会」など、3タームで合計17個の分科会が行われ、多方面の学びに繋がりました。



## ～医学連全体企画～

この企画では、医学連からの発表のあとに第 34 期医学連中央執行委員長かつ第 60 回宮崎医ゼミ全国実行委員長の河野絵理子先生にご講演いただきました。生徒会活動をしていた高校時代のお話から医ゼミでの平和企画を発端とした医学部入試差別に関する医学連としての活動について、そして医師として現在行っている取り組みについてお聞きすることができました。最後に、「Nothing about us without us」という考えのもと、自分の権利や弱い立場に置かれた人々の権利をまもるために、「わたしたちの意見を尊重して」と社会に発信することで社会はわかる、ということで講演は終了しました。



自治とは何か、医学連がどのような組織で、医ゼミとはどのような関係なのかを理解し、学生自治の重要性や医ゼミの魅力について考える時間となりました。

参加した学生からは、「学生時代の学びがどのように今後に生きてくるのかについて知ることができたので、とても今後のモチベーションにつながりました。」(医学科 6 年)、「自治会の活動のあり方を改めて考えることができた。神戸大学での自治会の裾野を広げていければと思った。」(医学科 4 年)といった自治に対して肯定的な感想が寄せられました。また、「大学自治会や医学連の活動を知ることができて勉強になった。」(医学科 5 年)、「医学連については知っていたが、様々なことをやっていることをはじめて知った。」(医学科 3 年)と自治会や医学連について知ることができたといった声や、「私は高校生のときに、コロナの影響により高校最後の学園祭が開催されず、このまま卒業するのも寂しいと思い、卒業式に和火を打ち上げようと企画したのですが、失敗した経験があります。和火職人さんや市の担当者、地域の消防隊等に許可をもらいに行き、資金集めもして、打ち上げられる状況になったのに、学校長の「高校生がこの学校の名前を使って資金集めしていることが問題で、打ち上げ花火の企画を進めることはだめ!」鶴の一声で、中止になってしまいました。どんなに頑張っても大人の責任や権限によって、一瞬にだめになっちゃう

ことを知り、私は諦め癖がついてしまいました。だからこそ、今回の話で、社会を変えようと頑張る姿に感銘を受けつつ、自分にはできないなあという尊敬の念を持ちました。これからも頑張ってください。」(看護科3年)と自分の経験談を添えた応援の言葉もいただきました。

## ディスカッション・交流会

本番中には発表や講演会の後にそれぞれグループごとにディスカッションを行いました。また、3日間ともその日の企画が終了した後に、参加者が自由にコミュニケーションを取れる企画として交流会を行いました。乾杯の音頭から終了の時間まで、各参加者が思いのままに交流を深め、学部学科・学年を超えたつながりを作る時間となりました。4年ぶりの対面開催ということもあって、今までオンラインでしか知らなかった人の新たな一面を知ったり、初参加者を迎えて新しい出会いが生まれる企画となりました。



## 全国準備期間

### 忽那先生講演会

今年の全国準備期間では、大阪大学大学院医学系研究科感染制御学の忽那賢志先生に、「COVID-19 これまでとこれから」というテーマでご講演をいただきました。ご講演では、新型コロナウイルス感染症をはじめとする感染症との向き合い方と先生がコロナ禍でご尽力されていた情報発信について主にお話をいただきました。以下に、ご講演の内容について紹介いたします。

#### <人類と感染症>

この項目では、感染症の歴史を取り上げられました。長い人類史の中で、感染症は幾度となく蔓延していますが、過去と現在では、感染症に対する知識や対策方法、そして流行の仕方が大きく異なっていることが紹介されました。新型コロナウイルス感染症の蔓延時における反省を踏まえて、次のパンデミックに備えて、現在の世の中において出来ることは何かについて考える必要があります。

#### <コロナと情報発信>

忽那先生は、コロナ禍以前から感染症の専門医として、ポスターやTVの出演などを通して、啓発活動に携わられていました。新型コロナウイルス感染症が蔓延し始めてからは、X(旧:Twitter)を用いたり、Yahoo!JAPANで記事を執筆されるなど情報発信に尽力されてきました。この項目では、先生が情報発



信をするうえで心掛けていたりことや情報発信をする意義についてお話されました。また、忽那先生の誹謗中傷との闘いについてもご紹介していただきました。以下では、医療者が情報を発信する意義についてご講演で教えていただいたことをご紹介します。

医療者が情報を発信する意義は、専門家による専門的な情報や届きにくい正しい知識を届けることが出来ることです。必要な情報を必要なタイミングで、メディアの事情に左右されず、メディアの解釈が介在しない状態で発信できるため、非常に有用であることが分かります。コロナ禍に医師が情報発信をする意義は、医学的に正しい最新情報を直接伝えることが出来ることと、医療現場で何が起きているのか伝えることが出来たり、問題点を共有し、解決につなげることが出来たりすることであると教えていただきました。

医療者は最新の知見を伝える必要があります。ここで大切なことは、科学的に正しい情報を伝えて感染予防に役立てることです。新しい感染症は、まだ誰も知らないことが多く、これまでの常識が覆される可能性があります。特に、エビデンスは変わっていくものであるという認識が必要です。新しい感染症のパンデミックにおいて、過去の考えに固執してはいけません。また、時に過去の発信内容と異なることがあり、前と言っていることが違うと言われやすいことにも注意が必要であります。



#### <COVID-19と臨床研究>

この項目では、COVID-19における臨床研究について取り上げられました。COVID-19では、未知の感染症であるがゆえに、多くの研究者が研究に取り組まれました。その結果、論文の鮮度が尋常ではないスピードで落ちていく現象があったそうです。また、日本の研究における環境についても触れられました。COVID-19の研究環境を踏まえ、さらに研究のしやすい環境へ進化させることが重要です。

#### <COVID-19と医療体制>

この項目では、COVID-19を通して見つかった今後の課題について主に取り上げられました。通常時の診療では見えてこなかった問題や通常時はやりくりで来ていたことがCOVID-19では問題になりました。医療のデジタル化が進んでいないため、情報共有が遅くなっていることが一例としてあげられると紹介されました。

また、先生が考える今後の課題は、感染症専門医の不足と感染症リテラシーの向上だそうです。特に、感染症リテラシーの向上は、SMSなどを通して誤った情報（例：コロナに感染したくなければ、××すればよい）も多く流れてしまうことから、非常に重要であると言えるのではないのでしょうか。

この講演をお聞きした学生の声を最後に紹介いたします。

「感染症を媒介するものの種類の多さに驚いた。自分たちが入手する情報はメディアによって手が加えられたものが多く、特にメリットとデメリットが存在するものでは、デメリットだけを大きく取り上げられてしまうと、判断が難しくなってしまう。」

「様々な立場の人がいるため、受け取り手に合わせて発信の仕方やツールを変えなければいけない。その人にあった方法や内容で発信することが大切であり、これは、患者へ説明するときも重要であると感じた。」

「医療者の知識のアップデートは非常に重要であると感じた。自分の専門のことですら、聞かれたら回答することが難しいことがあるにもかかわらず、コロナ禍では、医療者が総動員されたため、専門外である場合が多々あったと思う。そんな中、専門外のことについて聞かれた時どのように回答すべきか悩む。」

このご講演を通して、情報発信の意義や重要性について理解が深まりました。将来良き医療者になるためにご講演で学んだことを活かしたいと感じた学生も多かったのではないのでしょうか。



## おわりに

1955年に第1回医ゼミが開催され、今年で66回目を迎えました。医ゼミはこの間、全国の医療系学生の「学ぶ要求」と継続的な自主ゼミ活動に支えられ、時代によって少しずつ形を変えながら継続・発展してきました。

第63回群馬医ゼミ、第64回信州医ゼミ、第65回和歌山医ゼミは、新型コロナウイルスの感染拡大を考慮し、全面オンラインで開催されました。今回は、今年5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことを受け、感染対策を施し対面で開催することができました。対面開催が4年ぶりとなったため、準備や打ち合わせに様々な困難がありました。しかし、全国実行委員の「自分たちで学びの場をつくりあげ、全力で学ぶことの楽しさをより多くの学生に伝えたい」という熱い思いがあったからこそ、自分たちなりに考え、仲間と相談し、力を合わせる事ができたと思います。

今回の大阪医ゼミでは、「都市部の医療」と「人権」を2つの大きな軸として学習を進めました。今回の参加者が、医ゼミで学んだことを各地に持ち帰り、学びの場を広げることで、これからの医ゼミ活動を盛り上げることに繋がると信じています。

今回の大阪医ゼミで参加者の皆さんが得たものが、67医ゼミ、そして未来の医ゼミ・医療に繋がることを願います。

現地実行委員長  
芥子のぞみ